

2020.7.5 第一主日礼拝

I コリント 2:6-11 「御霊による啓示」

聖書

- 6 しかし私たちは、成熟した人たちの間では知恵を語ります。この知恵は、この世の知恵でも、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません。
- 7 私たちは、奥義のうちにある、隠された神の知恵を語るのものであって、その知恵は、神が私たちの栄光のために、世界の始まる前から定めておられたものです。
- 8 この知恵を、この世の支配者たちは、だれ一人知りませんでした。もし知っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。
- 9 しかし、このことは、「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、人の心に思い浮かんだことがないものを、神は、神を愛する者たちに備えてくださった」と書いてあるとおりでした。
- 10 それを、神は私たちに御霊によって啓示してくださいました。御霊はすべてのことを、神の深みさえも探られるからです。
- 11 人間のことは、その人のうちにある人間の霊のほかに、いったいだれが知っているでしょう。同じように、神のことは、神の霊のほかにだれも知りません。

はじめに

パウロとはどんな人だったのでしょうか。「私は、キリキアのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、ガマリエルのもとで先祖の律法について厳しく教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。そしてこの道を迫害し、男でも女でも縛って牢に入れ、死にまでも至らせました。このことについては、大祭司や長老会全体も私のために証言してくれます。」(使徒 22:3-5) と自己のことを語っています。これはパウロのことでエルサレムに騒動が起こったときの弁明の一文です。また、ユダヤ

州の総督フェストゥスの前で弁明しているとき、彼をして「パウロよ、おまえは頭がおかしくなっている。博学がおまえを狂わせている。」(使徒 26:24)と言わせたほどで、パウロはユダヤ教に精通し、豊富な知識を持ち合わせた器でした。ですから、人間的な知恵や力で人々を説得させて福音を伝えようと思えば、出来ない人ではなかったのです。しかし、彼はそうしなかったのです。なぜしなかったのかという理由を今日は皆さんと一緒に見てみたいのです。そこには、福音は人の知恵によってではなく、聖霊によって届けられるという神さまのご計画があるのです。

1. 私たちの価値観への提言

本題から外れるように聞こえるかもしれませんが、少しお付き合いください。今、皆さんと一緒に毎日のディボーションでペテロの手紙第一を読んでいます。この手紙の著者は使徒ペテロです。ところが一部の学者はペテロの著者性に疑問を持っています。なぜかというと、ペテロは漁師であり「無学な普通の人であった」(使徒 4:13)からです。そのような人がまるでパウロが書いたかのような洗練されたギリシャ語で手紙を書くことなどできないと考え、ペテロの著者性に疑問を投げかけています。実際「忠実な兄弟として私が信頼しているシルワノによって、私は簡潔に書き送り…」(I ペテロ 5:12)と記されており、ペテロのことばをシルワノが代筆した可能性は否定できません。この説に立てば、書いたのはシルワノですが語ったのはペテロということになります。あるいは、ペテロ自身が書いた書簡をシルワノが届けたという意味かもしれません。疑問を投げかける人がいたとしても、ペテロの著者性は支持されています。

なぜ、こんな話をしたのかというと、無学な普通の漁師にギリシャ語で手紙など書けるわけがないという発想を持つこと自体を皆さんはどのように受け止められるか、問いかけてみて頂きたいからです。私たちは人々にイエスさまのことを伝えるためには、知識や経験や有能な能力が必要だと思っていないでしょうか。それらがあつたことに越したことはありませんが、それが

なければ福音を伝えることはできないのでしょうか。ご存知のように旧約聖書はヘブル語で書かれ、新約聖書はギリシャ語で書かれています。原語から聖書を読むことの重要性が説かれ、それを説教の中に落とし込んでいく作業を釈義と言います。そうするとヘブル語やギリシャ語に精通していないと説教はできないのでしょうか。もしそうであれば、私は真っ先にはじき出されてしまいます。私たちクリスチャンも、牧師の出身大学や学位に興味を持ち、国内の神学校なのか海外の神学校のかなど経歴によって判断してしまうことではないでしょうか。

確かにパウロは有能な器でした。しかし、その有能さのゆえに福音が伝わったわけではありません。「私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリストのほかには、何も知るまいと決心していたからです。」(2:2)と、パウロはあえて自分の能力や力によってイエスさまのことを伝えることを封印したのです。なぜなら、神さまはこの世の知恵によって神を知ることにはできないと定められたからです。福音は人々が愚かだという宣教のことば(十字架のことば)によって宣べ伝えられるものであるがゆえに、パウロは十字架のイエスさま以外は何も知らないと決めたのです。

2. 奥義を示す御霊

十字架のイエスさまを人間の知恵や説得によって伝えることはできません。知識として伝えることはできても、イエスさまが私の人生に必要な方であり、イエスさまなしには生きられないという魂への語りかけは、この世の知恵によってはなし得ず、それは聖霊なる神さまによってのみなされるものなのです。パウロは信仰を受け入れることができる人の間では、「奥義のうちにある、隠された神の知恵を語る」(2:7)と言い、十字架に現された神の奥義を語ったのです。

奥義というと、ある世界を極めた人だけが達する世界のように思いますが、聖書が言う奥義(ギ: ミュステリーオン)は違います。それは、今まで知ら

れなかったものが今や啓示され明らかにされたという意味で、神さまが私たちの目を開き、見せてくださったもの、すなわち啓示されたものという意味があります。たとえば啓示の具体的な例として、人間の罪と救い、人間に対する神の愛、キリストの誕生・十字架・復活、内住のキリスト、永遠のいのち、世の終わり、新天新地など、福音の中に込められた恵みの数々を指します。これらは知的探求の結果得られるものではありません。パウロは「知恵ある者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の論客はどこにいるのですか。」(1:20)と問うて、知的探求によっては福音を知ることとはできないと強調しているのです。

私たちの教会には、障がいをお持ちの方が車椅子で礼拝に出席しておられます。今は感染症の影響で施設から出ることができないので、約4ヶ月お会いできていませんが、車椅子の方々から教えられることがたくさんあります。それは実際面だけでなく、霊的な面でもそうです。今は豊田市外の施設に移られた姉妹がよく「早く天国に行きたい」と言っておられました。障がいのゆえに地上で生きることが辛いからなのですが、「天国に行きたい」という思いは、イエスさまの救いを経験し天国を現実のものとして捉えているゆえに発せられる究極の希望であり、これこそ奥義と言えるものなのです。多くの人が、死んだら天国に行くんだよと言うのとは違います。イエスさまと共にいる天国をリアルに捉えているゆえの真の希望です。その姉妹にとって、イエスさまを知らなかったときの天国と、今イエスさまによって救われて知った天国は別物です。まさしく、前は知らなかったものが啓示によって説き明かされた結果なのです。

3. 御霊に期待して

人間の知恵によっては知ることができない福音の恵みを人はどうやっているのでしょうか。人間には知り得ないのに知ることができるって、なんか矛盾しているように感じると思います。この人間的には矛盾したことを見事に調和し実現させてくださる方が聖霊なる神さまなのです。「神は私たちに御霊

によって啓示してくださいました。御霊はすべてのことを、神の深みさえも探られるからです。人間のことは、その人のうちにある人間の霊のほかに、いったいだれが知っているでしょう。同じように、神のことは、神の霊のほかにだれも知りません。」(10, 11 節)。御霊は神さまの霊ですから、神さまのことをすべて説き明かすことができるのです。イエスさまを信じたクリスチャンは、信仰を持ったそのときに御霊を内に宿し、御霊とともに生きる者となります。ということは、クリスチャンは御霊によって神さまが持つておられるご計画や御旨を知ることができるということになります。そうです。私たちは御霊によって神のみこころに触れることができるのです。しかし、すべてが明らかにされるわけではありません。神さまは私たち一人一人の状況に応じて、ご自分の御心を明らかにされるお方です。ある人にはこれを明らかにし、別の人にはこれを明らかにしと、一人一人に異なるのです。これをクリスチャンが弁えていないと、私はあの人より良く聖書のことを知っているとか、逆に私はあの人より劣っているとか、変にクリスチャン同士で競争が起こってしまいます。自分が知り得た奥義を人に教えてあげようとするのも傲慢だと思います。必要なら御霊がその人に教えてくださるからです。

聖霊の働きに対して、人が自分の知識や経験で出しゃばりすぎると、神さまの働きはストップしてしまいます。神さまの御心は御霊しかご存知ないのですから、御霊に自由に働いていただけるように、私たちは自分の願望や計画から手を放さなければならないのです。そうするとき、御霊は自由に働いてくださり、神さまの御心を成し遂げてくださるのです。今、くびき会という集まりで将来の福祉について意見交換しています。この会を通して私は、自分の手から自分の思い描いたプランや願望を手放すことを学ばせて頂いています。手放すことに葛藤を覚えることがありますが、手放さないで握り締めていたら、神さまの御心はなされないかもしれないと思っています。手放す勇気と力を下さいと祈っている最中です。きっとその先に、想像したこともない神さまの恵みの世界が待っていると信じています。

まとめ

御霊が示してくださる神の奥義、それは人の想像を超えたものです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、人の心に思い浮かんだことがないものを、神は、神を愛する者たちに備えてくださった」(9 節)。このように、私たちの思いの遥か上を行かれる神さまの御心に心を向けるとき、自分の将来に希望が持てるのではないのでしょうか。自分が思い描く将来のさらに上にある神さまの御心。それを御霊によって握る生涯に魅力を感じます。現状から推察する将来像に縛られてしまいやすい私たちですが、その目を御霊に向けてみましょう。そこにある未だ見たことのないもの、聞いたことのないもの、心に思い浮かんだことのないもの、それを与えたく用意しておられる神さまに望みを置いて歩んで行きましょう。「あなたがたの信仰と希望は神にかかっています。」(I ペテロ 1:21) にアーメンと合わせて歩みたく願います。祝福をお祈りします。